

受けながら、トラブルを乗り越え、初めての小説を書き上げるまでを描く。
「ものがたりソフト」が活躍したのは、プロットと呼ばれる物語の骨格作りの過程だ。「登場人物の名前は」「主人公の特徴は」「どんな試練が起こる」などと、ソフトが尋ねる問いに答えて作家がアイデアのデータを人力してお



小説創作支援システムを開発した

夕刊文化

粗筋まとめ文章作

けられない学生もいるほどのレベルになってきた」と、プロジェクトを主導する松原仁教授は語る。来年度には「星新一賞」への応募を目指し、将来は「芥川賞や直木賞をとれるような作品を目標にした」と松原教授は意気込む。
国際日本文化研究センターの教授で評論家、作家でもある大塚英志氏は数年前に、脚



74歳になったが、卓越したボーカルの技術は健在だー写真 市川 幸

る、次々と昔の仲間が逝ってしまつたと嘆きの言葉を口にしながらも、それらは良き思い出といつメッセージを託しながら、観衆と一体となつて、その先の未来に歌が白熱していく。どこまでも明るく奔放なジャロウらしい素晴らしいカムバック・ステージだった。11月18日、ブルーノート東京(音楽評論家 青木 和富)

歴史学者

山内 昌之

こころの玉手箱



私には、これといって物の珍重癖や蒐集癖がない。わずかに興味があるのは、機会があれば切子を買いたい。切子も江戸切子もそれぞれ味わいがあり、どちらも好きである。
江戸切子には無色透明のガラスに細工を施した楚々、艶々たる可憐な雰囲気がある。酒類は、私の趣味でいえば

薩摩切子のペアグラス

断然シャンパンである。シャンパンの泡は、削られた切子の面に現れる「ぼかし」でますます複雑な輝きを増す。分厚い色ガラスの層が下へ行くほどに薄くなつてきた「ぼかし」と相まって、大きく深いカットがシャンパンを外光に反発させるのだ。私は、11月中旬に出かけた中東4カ国

シャンパン注げば光の競演



慶事に長友夫妻からいただいた

やまうち・まさゆき 1947年北海道生まれ。専門は中東・イスラーム地域研究、国際関係史。東京大名誉教授、明治大特任教授。「中東国際関係史研究」「歴史とは何か」など著書多数。2006年紫綬褒章を受ける。
(ドバイ、オマーン、ヨルダン、エジプト)でも仕事が終わると、この組み合わせの妙について、いま顧問を務める三菱商事の友人たち

と、ますます鮮やかになる。手元にある緑と紅の馬上杯は色被せガラスの一種であり、「島津磯崎彬電」を擁する会社の工芸製品である。杯にはローマ字で「慎ましやかにサインも刻まれているが、斉彬の集成館事業の正統的継承者が伝統を現代に適合させた新作・創作の一つである。
このデザインは、「矢来に魚子文」というようだ。さながら、細かくカットされた面の輝く様子が魚の鱗のようであり、海面に光の輝きが及ぶ小魚の群衆のようにも見えるからだろう。アラビア湾と紅海に縁のある4カ国でシャンパンを魚小文の切子で友人たちと一緒に味わえたら……。切子にまつわる私の夢である。